

顧客満足のため小口対応にも軸足

地域と共生し半世紀の歴史を刻む 昭和エスオーシー

編集部

昭和エスオーシー（本社・東京都府中市，高城正道社長）は，工場周辺に大型マンションが建設されたことに伴い，騒音・粉じんなど環境対策に万全を期している。都市型プラントにとって「地域との共生」が事業存続に不可欠となっており，同社は高さ5.5m，全長約220mの防音壁を設置。残コン・戻りコン処理場の出入り口には，消音型の門扉シャッターを採用した。また，今年度の活動目標のひとつに，戻りコン率2.5%の達成を掲げるなど，様々な観点から環境に配慮した取り組みを推進している。客先のニーズにきめ細かく対応するため，小型車による納入を重視し，出荷量の約3割を占める。市況の安定した三多摩地区で操業し，併せて社内合理化も徹底させることで一定の収益を確保している。

戻りコン率を2.5%以下に抑制

昭和エスオーシーは，1962年11月に昭和生コンクリートとして設立された。工場は三多摩生コンクリート協同組合販売エリアの東南部に位置している。また，北側には中央道が走り，その先に東京競馬場やサントリー府中工場がある。南側には多摩川競艇場があり，その先に多摩川が流れているというロケーションである。1964年5月に地元有力者によってプラントが建設され，操業を開始した。ほぼ半世紀の歴史を刻み，三多摩地



高城正道代表取締役



市川和彦工場長

区におけるパイオニア的存在だ。その後，1976年に旧大阪セメント（現住友大阪セメント）に営業譲渡され，1981年には大阪加州生コンと合併して昭和加州生コンに社名を変更。住友大阪セメントの発足に伴い，2001年12月に現社名となり，首都圏における直系生コン会社として事業基盤のさらなる強化を目指すことになった。

今年度の経営目標は，①一歩先んじた品質管理を優先し，常に信頼される生コン会社であり続ける②社員各自は，品質管理者として，それぞれの目標達成と役割を再認識し，社員間で切磋琢磨し，スキルアップに努める③自然環境と職場環境を守り，近隣との共生を図る④収益改善のため，トータルコストの低減と技術革新を継続する，の4つ。部門別に具体的な目標を掲げ，生産部門は「顧客のハイレベル品質への適切な対



写真-1 府中工場のプラント全景

応、生産設備の不具合ゼロ達成&戻りコン率2.5%の達成」を目指している。営業部門は「販売予算数量達成&販売価格改善の達成」、総務部門は「近隣環境問題の事前防止&クレーム迅速対応」といずれも分かりやすい。「&」を多用するあたりは欲張った目標にも映るが、書かれている内容は一目瞭然だ。このうち戻りコン率は、年間出荷量のうち3%程度発生しているが、「毎日チェックすることで、2.5%以下に抑制することになっている。小型車での配送が多いため目標をクリアするのは楽ではないが、処理経費を圧縮することで経営改善につなげたい」（高城社長）としている。府中工場は異物混入を防ぐための金属探知機を設置しているほか、骨材受け入れ時の誤納防止を目的とした回転灯やアナウンス機能を活用した三重のチェックシステムを導入して品質管理を徹底し、高品質な製品を安定供給している。また、顧客のハイレベルな品質要求に応えるとともに、軽量コンクリートや透水性舗装、クラフリートなど特殊コンクリートもラインナップし、幅広いニーズに応えている。2004年9月には工場単独で設計基準強度が60N/㎠までの高強度コンクリート（N・M・L・BB使用）に関わる国土交通大臣認定を取得している。

小口出荷の多さが経営の強み

同社は三多摩生コンクリート協同組合と玉川生コンクリート協同組合に加盟し、出荷比率は三多摩エリアが85%、玉川エリアは15%となっている。2011年度は、前年度比6%増の10万3千 m^3 を出荷した。「三多摩協



写真-2 鋼製の骨材サイロ



写真-3 骨材受け入れ時の騒音・粉じん対策も万全

組の2011年度出荷実績は20%増の127万4千 m^3 だった。需要はエリア内で「東高西低」の地域偏在があるものの、底打ちから回復に転じており、2012年度は前年実績を1割程度下回るものの、118万 m^3 と想定している。年初の契約残がすでに80万 m^3 を超えており、十分に実現可能な数字とみている」（同）。市況は組合運営がしっかりしており、結束も強い安定した推移を辿っているが、原材料や輸送費が上昇し、このコスト転嫁が課題とされる。そのため昨年12月の引き合い受付分から500円の値上げを実施している。市況対策を強化し、一丸となって新価格の浸透を目指しているところだ。

「最近、うれしいことがあった」と高城社長が喜ぶのは、コンクリート主任技士試験に最も若い試験係員が合格したことだ。小型車による配送が全出荷量の約30%を占めるため、物件の数がとにかく多い。終業時間が遅くなり、たまに早出の仕事もある。第1・3土曜を出勤日としているが、出荷予定がずれた場合などは第2・4土曜も交替で出る場合もある。その忙しい



写真-4 計量制御パネルの操作風景



写真-5 4年がかりで約220mの防音壁を設置



写真-6 路面を清掃するスーパー

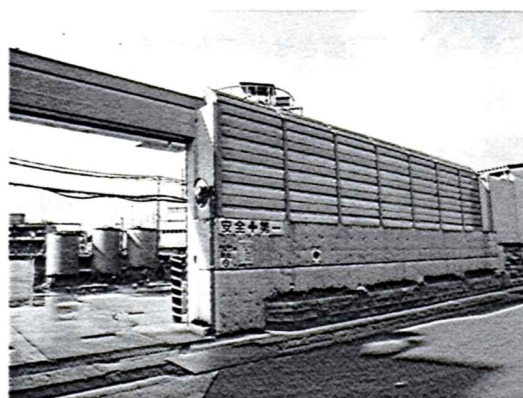


写真-7 消音型の門扉シャッターを採用

中で試験に臨み、見事に難関をパスした。こうした快挙を達成できた背景には上司の理解や充実した社内教育があり、そうしたことが奏功した結果だが、若手が頑張ると社内が活性化する。「小口出荷の多いことが当社の特徴であり、強みでもある。これを軽視すると、客先へのサービスが低下する」(同)とし、その意味でもきめ細かくユーザーサービスに徹しているところだ。同社の従業員数は現在、13人。コンクリート関連の有資格者数は主任技士3人、技士4人で、診断士試験にも挑戦中だ。また、東京都の公害防止管理者が3人いる。

近隣環境問題で新たな設備投資も

府中工場は2003年に設備を更新し、強制2軸型・容量3000ℓの混練ミキサを備えた日工製のプラント(写真-1)が事務所脇に位置している。骨材は鋼製サイロ(500トン×4基、80トン×2基、写真-2)とコンクリートサイロ(250トン×2基)に貯蔵し、粗骨材は青梅産硬質砂岩と横瀬産石灰碎石をブレンドして

使用。細骨材は砕砂と石灰砕砂を用いているが、7月にそれまで使っていた陸砂(千葉県香取産)を山砂(君津産)に変更した(写真-3)。また、人工軽量骨材(メサライト)も常時ストックしている。セメントサイロは200トン×1基、150トン×2基、100トン×1基、80トン×1基の計5基。出荷・品質管理システムは住友セメントシステム開発のSuper Net PS-Sと同XL-Qを導入(写真-4)。ミキサー車は大型13台を常備し、そのうち8台(5台は下請け)を所有している。小型車は10台備えている。

敷地面積は6000㎡あるが、細長い地形であり、奥まった場所はスラッジ水槽や脱水ケーキ置場、再生骨材置場などに利用している。そうしたなか、工場の隣に相次いで大型のマンションが建設され、2007年以降、抜本的な環境対策に迫られることになった。騒音対策では、2007年から4年間かけて約1億5000万円を投資し、高さ5.5m、全長約220mにわたり防音壁を設置(写真-5)。また、粉じん対策として場内散水のほか、工場から近くのスーパーまで毎日、スーパー(路面清掃

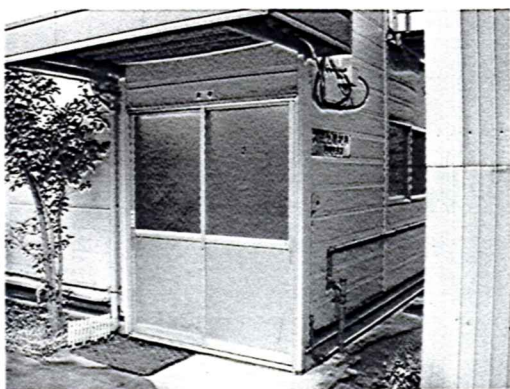


写真-8 飾り気のない食堂入口



写真-9 葛西シェフが調理

車、写真-6)を稼働させ、ごみやほこりを除去している。残コン・戻りコン処理場の出入り口には、消音型の門扉シャッター(写真-7)を採用した。さらに集中ゲリラ豪雨への対策として、工場内の雨水が外部に排水されないように、使わなくなったセメントサイロを再利用して集水タンクを製作、設置した。このほか安全対策として、ミキサー車をはじめ全ての車両について工場周辺における運行速度を25km以下に抑制し、通学時間帯は大型ダンプの工場入場を一時停止している。

評判のよい社員食堂

経営目標のひとつである「トータルコストの低減と技術革新」のため、猛暑が続いた昨年夏にあえて断行したのが、午前中のクーラー停止と事務所屋根の遮熱

塗装だった。昼までエアコンをかけないとどうなるのか。「室内温度が33℃の日もあった。痩せる思いをし、実際、痩せました」(市川和彦工場長)という。屋根の遮熱塗装は従業員全員で作業したが、去年はほとんど効果がみられなかったそうだ。「暑中コン対策もいろいろ検討している。他社の事例もいろいろ検討しているが、現状はまだ決め手に欠けるようだ」(同)と語る。今年3月には節電のため、事務室内の照明を全てLEDライトに更新した。

ところで、昭和エスオーシーには他社で滅多にお目にかかれない「社員食堂」がある(写真-8,9)。「おなかに力が入るようにと、高カロリーの〈デブエットメニュー〉にしている。社員はもちろんのこと、応援でよそから来た運転手にも評判がよい」(高城社長)。